
チョコレートジャンキーズ・ヴァレンタイン

森本エリ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

チョコレートジャンキーズ・ヴァレンタイン

【Nコード】

N5319B

【作者名】

森本エリ

【あらすじ】

チョコレート・ショップ『XTC』のオーナーショコラティエ・トラビス・オリビエ(32)の、チョコレートマジック。『チョコレートジャンキーズ』ヴァレンタイン特別編。

チョコレートジャンキーズ・ヴァレンタイン

(前書き)

久しぶりなので、雰囲気が変わるかも知れません。

聖・ヴァレンタイン。

西暦270年2月14日に処刑されたキリスト教司祭のバレンチノ（英語ではバレンタイン）の命日に当たるこの日は恋人達にとって特別な『愛の日』。

そして、もちろん、チョコレートショップ『XTC』にとっても特別な日である。

ヴァレンタインの前、一か月から、或いは一年も前から予約が入る『XTC』当日限定のチョコレートギフトはどんな恋も叶えるという評判がある。特別な、大人達のためのチョコレートという事で、『二十歳未満と恋人未満はお断り』という暗黙の了解まで出来ているほどだ。

「よし。出来た」

2月13日・18:45PM・

シヨコラティエ界きつての伊達男、トラビス・オリビエ（32）は唇に妖艶な笑みを浮かべて、目の前に並べられたトリュフを眺めた。

本日の営業時間中はミシェルとシヨコラに任せて、厨房に籠って作り上げた特別な一品。

それらは明日のヴァレンタイン、当日限定30個のスペシャル・トリュフ達である。

普通のアソートに一粒だけ赤い銀紙で包んで入れておく。（このチョコレートの効果は一粒で充分なのである。）

“地獄境の森に棲む・魔女”と噂されるヴィヨンカに、毎年ヴァレンタインに向けて、分けてもらった“媚薬”を仕込んだ、特別な

トリユフ。

トラビスも半信半疑でその“媚薬”を貰っているのだが、何故か味見する気になれなかった。薔薇の香りに似たその液体をガナツシユに混ぜて、トリユフを作ったのだが、厨房の中には濃厚な薔薇とカカオの香りが充満して、心なしか身体が火照るような気もしくもない。

トラビスは腕を組み、右眉をあげて息を吐いた。

果たして、これらのチョコレート達に本当にそんな効果があるのか？ そう疑いつつも、このチョコレートをいまだかつて自らはもちろん、シヨコラにも、口にさせたことはない。

厨房のガラス越しの、カウンターから、悪戯子猫のまなざしで、こちらを覗き込む、シヨコラと目が合う。

そして、その隣りにも、同じようなクリアブルーの瞳。

トラビスはさり気なくその四つの好奇の輝きから視線を逸らし、背を向けた。媚薬なんて、漫画じゃあるまいし……

トラビスはそう思いながらも、ニンフの舌を持つシヨコラに味見させるべきかを迷っている。

……しかし、ヴィヨンカ婆さんからもらったこの香料をただの香料と侮るべきか……。

考えれば考えるほど、その“香料”が“媚薬”なのではないかと、信憑性を増して来る。

トラビスは散々悩んだ末、もう一度ガラス越しに視線を向けた。いくら、なんでも、ミシエルに媚薬が効いたら嫌だ。

かと言ってシヨコラに効いたら、犯罪だ。

こうなれば、自分？

……いや、どこの世界に自分に媚薬を使う馬鹿がいる。

そもそも、これが媚薬かも怪しい……。

ヴィヨンカ婆さんからかわれただけかも知れない。

散々苦悩するトラビス。

『この媚薬はね。落したい相手と二人だけの時に使うんだよ。大勢いるところで使うと、誰に恋したらいいか判らなくなって発狂しまうからね。まあ、チョコレートに混ぜてしまえば、効果も薄れて、せいぜい官能的な気分になるくらいだろう』

トラビスは毎年この限定チョコレートを購入しようと躍起になっている女性達を思い浮かべる。

……まさか。

そう思いながらも、銀板の上のトリュフ達を見つめる。思い悩むトラビスの思考を電話のベルが遮断した。

皆、この濃厚なカカオと薔薇の薫りに酔っているだけさ。そう思うことにして、トラビスは厨房を出た。

「あ。オリビエさん。セラヴィ氏から注文が入りました」

金色の巻き毛に薔薇色の頬を持つ美少年が、従順な笑みをトラビスに向ける。

「ああ。いつものやつだな。悪いがミシエル、セラヴィ氏の屋敷まで配達してもらえるか？俺は明日のチョコレートを包まなきゃならない」

トラビスの頼みにミシエルは快い返事をして、二階に向かった。

トラビスは郊外の屋敷に住むセラヴィ氏の為のシヨコラを、シヨウケースから物色し始める。

甘さ、苦さはもちろん、蕩け具合や歯応えといった、まるで人生のように普遍的で、至福の薫り高く、見た目も鮮やかなチョコレートを選ぶ。

その多彩な風味にばらつきがないのは、やはり、恋の面影というトラビスとセラヴィ氏の共通の思い故か。

トラビスがシヨコラティエ界のドン・ファンならばセラヴィ氏は名実ともにフレンテーナに名を馳せた芸術界のドン・ファンなのだった。

ポルドーの包み紙と戒めのように厳粛な艶黒のリボンを選ぶ。

禁じられた情熱を表したラッピングは、先輩に向ける少々の愛嬌である。

この紐を解けばたちまち封じていた官能が蘇る。そんな脅迫にも似たメッセージを込め、トラビスは微笑した。

セラヴィ氏は今七十を過ぎたはずだが、五十歳下の美しい、元・バレエダンサーの妻と郊外の屋敷に住んでいる。

明日の為に、アレを入れておくか。

トラビスはほくそ笑みながら、厨房へ戻った。

「……………ん？」

厨房に入るなり、トラビスは違和感を感じた。辺りを見回せど、目立った変化は見られない。

ハツとして、腫瘍人物の存在を目で探す。

腫瘍人物こと、シヨコラ・ドビュージュは店先でバケツに蹴つ躓けつつまずいているところだった。

まさかな……。トラビスは微苦笑しながらも、むせ返る甘い香り

にどこか息苦しさを感じ、暗燕脂のシャツの詰め襟を開襟にした。いくら、シヨコラでもこれには手を出すまい。

そう高を括り、トラビスは箱の中に例のトリユフを二つ仕込んだ。いくら彼でも、ご老体には刺激が強過ぎるだろうか？そんな事を思いながら、トラビスは手際よく、ラッピングを完了させた。

ふとした拍子にボウルに残っていたチョコレートが指についてしまい、トラビスは癖でそれを舐めとった。

「オリビエさん！支度できました」

ミシエルが軽快な声と共にドアを開く。

「おう。ミシエル。よろしくな」

そう微笑んだトラビスの顔がいつもにまして妖しく見えたので、ミシエルは思わず顔を赤らめた。

トラビスは何故か舌先に甘い痺れを覚え、ミシエルに小包を渡した後、並んだトリユフをみた。

「オリビエさん？」

心配そうにトラビスを伺うミシエル。

「なんでもない。ちょっと匂いにあたっただけだ」

「そ、そうですね。では、いつてきます」

「ああ。配達が終わったら、直帰して構わない。明日も忙しくなる

だろうから」

「わかりました。では、いってきます」

「おう。気をつけてな」

ミシエルを送り出し、手を洗う。

立ち暗みを覚えたトラビスは、もう一度、ボウルに手を伸ばした。

まさか、いや……。

トラビスは何気なくトリュフを数えた。

1、2、3……………27。

トラビスは厨房を飛び出した。

セラヴィ氏の小包には二つしか入れていない。

あと一つは間違いなく彼女の口の中だ。

「シヨコラ!!」

トラビスは背後に詰め寄り、黒いワンピースの肩を思い切り掴んだ。
力なく振り返ったその顔は、上気して火照っている。

「トリュフをつまみ食いしたな？」

トラビスの厳しい声も介さず、しなだれかかるシヨコラ。

呼吸が、浅く短い。

しどけなく半開きになった唇から、答えの代わりに、甘い薔薇と力
カオが薫った。

トラビスの背中に冷たいものが流れる。

そしてその背筋が、ぴくりと反応する。

シヨコラのたおやかな指が、腰の辺りをゆっくりと撫でたのだ。

「シヨ、シヨコラ……？」

恐る恐る名を呼ぶと、熱っぽく潤んだ瞳が、ねっとりトラビスを見上げた。

すっかり怒りを忘れて、トラビスはシヨコラの蠱惑的な眼差しに魅了されてしまう。

薔薇とカカオの濃厚な薫りがシヨコラの甘い体温で強調される。

ヴィヨンカ婆さんを侮った。

トラビスは後悔したが、むせ返るような色香に思考が朦朧とし始める。

「シヨコラ……」

指はゆっくりと這い上がり、トラビスの両頬を捕らえた。

シヨコラの不敵な微笑を浮かべた、淡い桃色の唇がゆっくりと近づく。いくら閉店後とはいえ、店内でこんなことをしているのか。

途切れそうな理性を奮い立たせ、トラビスは身体を離れた。

「シヨコラ、悪ふざけがすぎてるぞ」

動揺を上手く隠せないままトラビスは店内のブラインドを閉めていく。普段の閉店準備が、しらじらしく感じられる。

違う違う。これは仕事の一部だ。言い訳のように自分に言い聞かせながら、トラビスは機敏に動く。

これじゃ密室を作ってるだけじゃねーか！

そうツツコミながらも、チョコレートシヨップ『XTC』は完全な

密室になってしまった。
こなれた自分が憎い。

「シヨコラ、俺は明日のチョコレートを包まなきゃならないから、先に帰りな」

トラビスは厨房の前で忍び寄る熱情の肢体を制するように、振り向き、人差し指を向けた。
そんな牽制の甲斐もなく、かすれた吐息がトラビスの名前を形取る。

「シヨ……シヨコラ……」

後ろ手に掴んだノブが緩くまわる。トラビスの胸にシヨコラの体重がかかり、二人は厨房へなだれ込んだ。

もの言わぬ彼女が、今日は空恐ろしくなる。
しかし、匂い立つ色香が、トラビスをこの場に止どめる。

「シヨコラ……」

吐息の距離が、かつてないほど近い。
従業員の女の子には手を出さない。それは彼のこだわりの一つでもあった。

関係に及んでしまうと、必ず、ややこしい状態になり、仕事に歪みが出てしまう。

……そう頭では、解っているのだ。
頭の中で、は。

しなやかな腕が首にまきついて、柔らかな唇が押し当てられた瞬間、トラビスの理性は弾け飛んだ。

必死に差し込まれようとする軟体のうねりが、彼の唇を割ろうと蠢いている。

これには応えてやらなければ。

そして、一流の舌を、チョコレートの子の舌を味わいたい、という願望が彼を動かした。

「んんう……」

シヨコラが堪え切れずに、声を漏らす。

舌を絡め合い、トラビスは甘美な匂いと感触に溺れてた。

これは……？

今までに感じた事もない感覚　浮遊感、そして、大きなうねりに飲み込まれそうになる、圧迫感、すぐ後にくる、無重力に引き上げられるような、胸の衝撃。

「ああ……シヨコラ……」

うわ言のように、トラビスは彼女の名を呼んだ。

かろうじて、彼女から離れ、誘い込むように、後ろ歩きで厨房の中へと進むトラビス。獲物を追い詰めるように、にじり寄るシヨコラ。

相変わらず、呼吸は浅く、紅潮した頬と、もの欲しげでうつろな眼差しをしている。

これ以上はいけない。

トラビスは自分にそう言い聞かせるが、自らを拷問にかけているのと、同じだった。

調理台に腰がぶつかり、もう、後がなかった。

いけない、と言い聞かせることで自分を煽っているのも分かっている。

理性と本能のせめぎ合いを心のどこかで楽しんでいる。

しかし、媚薬で女を動かしていると言う事が、唯一、気に食わない。シヨコラはピンヒールを鳴らしながら、ゆっくりと、彼に近づく。

トラビスは体勢を持ち直し、襟を正す。

「来いよ。シヨコラ」

艶めかしい微笑を口許にたたえ、シヨコラはトラビスの言葉に引き寄せられている。

トラビスはボウルに残ったチョコレートを指になすりつけて、シヨコラの前に差し出した。

「お前の舌で教えてくれよ」

シヨコラは大きく呼吸をしながら、その指を両手で柔らかく包み舌を伸ばした。

感嘆を漏らしながら、その指に舌を這わせるシヨコラ。

丁寧に舐めとりながら、肢体を震わせている。

「……………美味いか？」

ちゆるり……………、と音を立てて、指が唇から抜き取られる。

しなやかな舌がその唇を滑る。

恍惚とした眼差しが、トラビスを見上げて、熱い吐息が、鼻先をかすめた。薔薇とカカオの甘い薫り。

シヨコラの腰を引き寄せ、鼻先がつきそうな距離でトラビスはもう一度尋ねる。

「……………どうだ？俺のシヨコラの味は？」

トラビスの問いにシヨコラは笑みを深くして、挑戦的な眼差しを向ける。

“あなた自身で試してご覧なさいな”

そう言わんばかりに覗きこむシヨコラ。

その指には魅惑のトリユフがあった。

「味わっても……いいか……？」

自らの吐息も熱く、声がかすれているのが解った。

もう、どうだっていい。この蕩けたシヨコラを、早く、味わいたい

トラビスはトリユフを歯にくわえ、ゆっくりと迫ってくるシヨコラの唇を待ち望んだ。

「オリビエさん！」

ミシエルの声で、トラビスは、がくんと、頭が落ちるような感覚を覚える。

次々とざわめきを鼓膜が吸収し始めて、自分が、休憩室で居眠りをしていることを思い出した。

「……ああ、ミシエル………すまない。チョコレートがまだだったな」

微苦笑しながら立ち上がるトラビスを不思議そうにミシエルが見ている。

「……限定チョコレートなら、すでに完売しましたよ？」

ミシエルの言葉がハンマーのようにトラビスに衝撃を与えた。

「どづいことだ?!」

「昨日、オリビエさんが徹夜でご用意されたアソートは午前中に完売しました」

ミシエルは戸惑いを隠せずに、しかし真っ直ぐトラビスを見て答えた。

「そ、そんな……馬鹿な」

「徹夜でお疲れになっっているんでしょう。大丈夫ですよ。今日の目玉は完売しましたし、僕ら……まあ、彼女は微妙ですけど、お店は回っています」

「ミシエル、今何日の何時何分だ」

「え?14日の14時14分です」

いよいよトラビスは眩暈を覚えた。
まったく記憶が途切れているのだ。

「セラヴィ氏がお見えになっっているんですが……、大丈夫ですか?
オリビエさん」

「セラヴィさんが!」

トラビスは、この不可解な出来事の糸口を見つけた気持ちになり休憩室を飛び出した。ごった返した客をすり抜け、店先のテラスに白髪の老紳士を見つけた。

「こんにちは。セラヴィさん！わざわざお越し頂けて光栄です！」

「やあ、トラビス！相変わらずの色男だな！」

二人は、親しみの籠った抱擁と、握手を交わした。

「トラビス、君が寄越してくれたシヨコラだが……」

ふいに、セラヴィの声がひそめられた。

トラビスは耳を近付けて、言葉を待った。

「……まさに媚薬のようなシヨコラだった……君のお陰で情熱が蘇ったよ。ありがとう」

トラビスは、ぎょつとしてセラヴィを見返す。

「さすがに身がもたんでな、休憩ついでに礼を言いに来たんだ」

冗談めかして片目をつむると、セラヴィはトラビスともう一度握手を交わし、踊るような足取りでハイヤーに向かった。

「素晴らしい愛の日をありがとう」

セラヴィはそう言い残し、去ってしまった。

「どづいうことだ……？単に夢を見ていただけなのか？」

トラビスは呆然としたまま、セラヴィが座っていたチェアに、力なく腰を下ろした。

ふと、店内に視線をやると、箒を杖に、大きく欠伸をするシヨコラが見えた。

チョコレートジャンキーズ・ヴァレンタイン

(後書き)

素敵なヴァレンタインをお過ごしください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5319b/>

チョコレートジャンキーズ・ヴァレンタイン

2009年3月11日13時53分発行